

巻 頭 言

初夏の“新ジャガ”生産までを振り返る

—主産地の長崎県島原半島を例として—

元長崎県総合農林試験場愛野馬鈴薯支場長 小村 国則

島原半島の5月上中旬は、“新ジャガ”収穫の真っ最中である。掘りたていも特有の香りとみずみずしさが魅力である。暖地でのジャガイモ栽培は春、秋の冷涼な期間を利用して年2回行われてきたが、春作は収穫時期が6月中下旬の梅雨期と重なり、疫病等によるいもの腐敗という大きな問題をかかえていた。主産地の島原半島内でも南西部の海岸線に沿った温暖な地域では、昭和20年代後半から北海道や長野県産種いもを用いた春作早出し栽培が行われてきた。さらに昭和42年頃からポリフィルムを用いた冬作マルチ栽培が行われ、4月末から5月収穫の“新ジャガ”として出荷された。昭和45年の大阪での万国博覧会開催に伴いジャガイモが高価格で販売され、「男爵薯」、「農林1号」、「メイクイン」等の作付面積が増加した。昭和47年4月2日の降霜による甚大な被害にもめげず、翌年の作付面積は増え、順調な生育であったため高収益をもたらした。その後も「メイクイン」の需要が多くなり、作付面積も伸びた。

一方、半島北部地域では晩霜が3月中下旬まで見られるので北海道産種いもを用いた冬作マルチ栽培は種いもの齢が進み、小さいものが多く収穫期が遅れるため普及しなかった。筆者が昭和49年4月に半島北部に位置する長崎県総合農林試験場愛野馬鈴薯支場（現農林技術開発センター農産園芸部門馬鈴薯研究室）へ赴任した当時の支場周辺一帯はジャガイモの採種地域となってい

た。5月下旬は秋作用種いも「タチバナ」の白い花で一面がおおわれ、雲仙行きの観光バス車内でも美しい花が紹介されるほどであった。青果用としては春の「ウンゼン」、「シマバラ」、秋の「タチバナ」の生産が行われ、とくに「タチバナ」は昭和35年頃から昭和43年をピークに作付面積が伸び、昭和50年代半ばまで栽培された。春作ジャガイモが6月中下旬収穫のため価格も安く収益が少ないため、秋作ジャガイモを重要視した栽培体系であった。

昭和50年代に入り、支場周辺地域では秋作産種いもの温蔵浴光催芽技術を用いた春作マルチ栽培が行われるようになり、5月上中旬の収穫が可能となった。5月のさわやかな天候の下での収穫作業は心地良く、いもの土離れが良いため外観も良好で、“新ジャガ”として高価格で取引された。また、食味良好な「デジマ」は春、秋ともに栽培され、全国的に需要が多くなり、昭和50年代の黄金時代を築いた。従来の春作普通栽培では「デジマ」はいもの肥大がやや遅く収穫時期が遅れるため腐敗が多く、その後育成された「ニシユタカ」は肌あれ症が問題となっていたが、春作マルチ栽培の普及に伴い腐敗や肌あれ症は減少し、両品種の優れた特性が発揮された。先人達の知恵を結集した“新ジャガ”栽培技術の普及と品種育成の技が作付面積を増やし、地域経済の活性化に繋がった。現在も変わらず半島全域の基幹作物としての地位を保ち続けている。